

第三章 38) アニューマス耕地 (コレゴ・リッコ駅)



僅かに面影を残すコリゴ・リッコ駅

パウリスタ線リンコン始発～ジャボチカバール終点駅（リンコン、チンビラ、モツーカ、ジャ、ハモンド、グアリバ、コレゴ・リッコ、ジャボチカバール）この路線 1965 年頃はまだ運行されていた。

この地方の諸植民地の繁栄に海外興業株式会社の企業欲が俄然動いた。1919 年ブラジル拓植株式会社が海外興業株式会社に合併統合した。

1919 年既成コーヒー耕地を海興が購入したのが、コレゴ・リッコ駅のアニューマス耕地であった。全面積 600 アルケーレス (1,500HA) コーヒー株数 32 万株。ここの初代支配人江越信胤（のぶたね）農学士、後年聖市総領事館内拓務省勸業主任となって、在伯邦人の農業指導役を勤めた。

農場 2 代目支配人は矢崎節夫氏（第 1 回笠戸丸移民）であった。3 代目は栗山篤氏。

*伊波永吉、1917 年 8 月、河内丸、沖縄県中頭郡、配耕後各所転じ、パラナ州クリチーバに在住。
（「ブラジル日系紳士録」748 ページ）

*大城松助、1919 年 12 月、讃岐丸、沖縄県島尻郡出身、入植のちカンポ・グランデ郊外に移転、薪炭業を経て果樹園経営。（「ブラジル日系紳士録」919 ページ）

*園原勇次郎、1914 年、帝国丸、熊本県葦北郡、ドアルトに 1 年半、サン・マルチーニュ 4 年、マルタ 2 年。計 7 年半のコロノ生活の蓄財でコリゴ・リッコ植民地に 80HA の農地を購入する。（「ブラジル同胞活躍の姿」）

*国吉亀栄、1918 年 9 月、博多丸渡伯、沖縄県島尻郡出身、就労後さらにカタンツーパー市移転就労、1948 年プ・ブルデンテ市に移転、国吉商会開業。（「ブラジル日系紳士録」650 ページ）

*馬場乙雄、1919年12月、ハワイ丸渡伯、長崎県大村市出身、農業に就労、プ・ベンセツラウにてコーヒー園経営、後年ミナス州在住。（「ブラジル日系紳士録」880ページ）

*増田猛、1919年12月、讃岐丸、群馬県吾妻郡、入耕さらにランチャリアに移転、農業に従事、数箇所を転じるながらアダナンーチナ在住。（「ブラジル日系紳士録」588ページ）

*滝川秀雄、1927年6月、ブエノス・アイレス丸、富山県中新川郡出身、農場に入植、以後数箇所転々と移転し1959年聖市に移転在住。（「ブラジル日系紳士録」931ページ）

*渡辺万次郎、海外興業株式会社に入社、1927年10月モンテビデオ丸、山形県米沢市新町出身、海興アニューマス農場職員、帰国さらに再渡伯、南米土地（株）支配人となりピニアニット直営農場の開拓。ウライ市の草分け。（「ブラジル日系紳士録」773ページ）

*小川克雄、1929年3月、神奈川丸、愛媛県新居郡西条町出身、アニューマス農場に入植、10年後オリンピア市に移転農業に従事。（「ブラジル日系紳士録」719ページ）

*護麻迫（ゴマサコ）仲次、1930年1月、若狭丸、鹿児島県御調郡出身、コレゴ・リッコに入耕、製糖工場、建築に従事、1935年インダイアツーパー移転。（「ブラジル日系紳士録」）

*大江太門、1932年3月、ブエノス・アイレス丸、山形県北村山郡高崎村出身、アニューマス農場で5ヶ年就労後、トレスバラス移住地中央区に入植、一貫してラミー栽培専門であった。（「トレスバラス移住地開拓20周年史」692ページ）

*富田勇、1932年渡伯、茨城県鹿島郡鉾田（水戸農学校卒）、アニューマス農場にて農事を研究後、マリリアに転じプラッタ校奉職。（パ延長線教育史刊行会）

*伏木正恭、1934年2月、マニラ丸、京都市東山区今熊野出身、アニューマス農場に入植、後年パラナ州カンポ・モロン市在住。（「ブラジル日系紳士録」856ページ）